



# エイジ・オブ・ イノセンス

12月23日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 12月23日のおはなし「エイジ・オブ・イノセンス」

ジョンが死んだ1980年、ぼくはまだ17歳だった。高校2年生で、国語以外に得意な科目はなく、小さい頃は好きだった音楽も図画工作もいつのまにか面倒くさそうなものになってしまっていた。一人っ子で、おまけに友だちが少なかったので、影響を与えてくれる同世代もいなかったから、ビートルズすらろくに聞いたことがなかった。学校で話題になるお笑い番組もアニメ（という呼び名は当時まだとても新しい響きを持った言葉だった）も見たことがなかった。セックスはおろか、女の子とキスしたことも、手をつないだことさえなかった。なにしろ17歳のぼくは、まだ女の子と付き合ったことがなかったからだ。そして闇雲に本ばかりを読んでいて、図書館の本棚を50音順になぎ倒すような勢いで読んでいった。だから森鷗外や夏目漱石やディケンズやトルストイなんかも読んでいたけれど、同じくらい星新一や筒井康隆やアシモフやハインラインなんかも読んでいた。なぜそれらを対照するのかって？ それはつまりそういう時代だったってことなんだ。

ジョンが死んだ1980年、ぼくはやたらと怒っていた。政治家の汚職のニュースに怒り、大企業が垂れ流す公害の話に憤りを覚え、交通死亡事故数の増加にふざけんなと毒づき、八百長試合の報道に怒髪天を衝き、拳銃や麻薬で人を支配する暴力団を呪い、国家権力を笠に着るインチキな役人や警官を抹殺したいと願い、世界のあちこちで進行中の戦争を推し進める者どもを地獄につき落とすことを考えていた。絵に描いたようなイノセンス。そういえば最近こんなことがあった。二十歳そこそこの人たちが集まる会があって、ぼくは招かれて顔を出した。彼らはアートに新しい息吹を吹き込もうと理想に燃えている。優れたタレントが揃っているというので、楽しみにして参加した。けれどそこで交わされていた会話を聞いて、ぼくはにこにこ愛想を振りまきながらも早々と退場した。そこでの議題は、企業スポンサーの名前を冠した会場を使用することの是非だったのだ。一切の束縛から自由であるべき我々アーティストが、と彼らのひとは言った。拝金主義の権化たる企業の金にまみれて活動してどうするんだ！と。イノセントな。あまりにイノセントな。

でも、ジョンが死んだ1980年、ぼくは彼らと同じようにイノセントだったので、ジョンの死のニュースをきっかけに、まずさんざん流れていた「イマジジン」を聴き、「スターティング・オーバー」を聴き、数少ない友人の一人にカセットテープを貸して貰って『ロックン・ロール』と『心の壁、愛の橋』を聴き込んだ。ちなみにその時のぼくは『ロックン・ロール』がカバー集だということも理解できないほど洋楽に、というより音楽に疎かった。たちまちぼくはジョンの信者になり、遡ってビートルズのアルバムに触れるようになり、メガネを丸眼鏡に変え、プレイボーイに載っていたヨーコと一緒にニューヨークの街角にたたずむジョンの写真を元に髪型を整え、黒いタートルネックのセーターとジーンズとスニーカーを買った。ちなみに、その時までぼくは靴のブランドに人気不人気があることすら知らなかった。それくらい同世代の中でも超弩級に世間知らずだったんだ。いずれにしろ、ぼくは写真で見たとおりのジョンの服を着て同じ髪型をして、同じ眼鏡をかけて、マーク・チャップマンも真っ青な狂信的ファンの一丁上がりとなった。

ちなみに、いまなおぼくは丸眼鏡をかけていて、黒いタートルネックのセーターを着て、ジーンズにスニーカーを履いて外に出かける。さすがにジョンの狂信的なファンではなくなったものの、そのコーディネートがぼくのお気に入りの、というより落ち着く服となってしまったからだ。もしジョンが生きていれば四半世紀も同じ服を着ているわけがないことを、いまのぼくは理解できる。だから、ここにはもうそれほどの深い意味はこめられていない。でもそのいでたちのおかげで、ぼくはしばしば思いがけない誤解を受ける。初対面の人が勝手にぼくをアーティストだと決めつけるのだ。近所の魚屋さんにはカメラマンかといわれたこともあるし、ぼくを美容師だと決めつけて話を始める女性も何人かいた。つまりジョンのアイコンが、自動的に「ひりひりするほどピュアなアーティスト」という幻想を投影する映写機のスイッチを入れてしまうらしいのだ。そんな時、ぼくは笑い、特に否定もせず、相手の思いたいように思っただけで貰うことにしている。いまのぼくが100%ジョンとは無縁な、むしろ真っ逆様な生き方をしていることなどわざわざ伝えたくは仕方がないだろう？ そういうわけでさっき言ったようにイノセントな若者達から

招待を受けるようなことも起こるわけだ。

17歳のぼくが聞いたら怒りのあまり卒倒してしまいそうな、イノセンスとは遥かに隔たった、日々の仕事の合間合間に、ぼくは時折お気に入りの場所に出かける。入館料を払い、展示された絵画を、彫刻を、インスタレーションを、映像を、映像の中の自分を、映像の中の自分の中のゆがみをじっくり見る。離れて見て、近づいてのぞき込んで、タイトルが付いていればタイトルを読み、解説が付いていれば解説も読む。ひとつひとつの作品をととても丹念に見る。とても、とても丹念に。だからせいぜい3つか4つの作品を見るころにはだんだん疲れてくる。集中力が欠け始めるんだ。でも意外と頑張り屋だからぼくは、そんなことくらいで逃げ出したりはしない。5作品目、6作品目と着実に進んでいく。展示室の片隅に座る係員が目に入ると、つい代わってほしくなる。それほどヘトヘトになる。でもぼくは休まない。休むと航空機に積んだ臓器のことや、運び屋の皮下に埋め込んだICチップのことを思い出してしまうから。純度の高い極上のパウダーが渋谷の女子高生たちの体内に流れ込む頃にはどれだけ薄まった安物に変わっているか考えてしまうから。

ソファのある展示室に着くとぼくは初めて、休憩することを自分に許し、展示室の中央近くのソファにどっかりと腰をすえる。今日はもうここまでにしよう。明日はこの続きを見よう。そんなことを考えながらその部屋の空気を吸う。大きく息を吐き、大きく息を吸い込む。ぼくが息をすると館内が酸素不足に陥る。なぜならぼくは、売り買いされる人間たちや丸刈りになった土地や生物化学兵器のトレンドの残像でよどみきった汚水の深い深い水底から、つかの間の呼吸をするため水面に顔を出したところなのだ。自分が仕掛けた呪いに囚われないように、たっぷりの空気を吸うためぼくは大きくあえぐ。もしその時たまたま誰かが一緒にいると、まるで美術館ごと吸い込んでしまいそうな勢いだねと批評される。一作品一作品、丹念にじっくり全力で味わって、最後は美術館を丸ごと飲み込んで帰っていく勢いだねと。

だから人はぼくを、美術館の泥棒、と呼ぶ。ぼくが盗んでいるのは美術館ではないのだけれど。

(「美術館の泥棒」 ordered by みやた-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## エイジ・オブ・イノセンス

<http://p.booklog.jp/book/41206>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41206>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41206>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.